



有害な無知：無知学は反知性主義を擁護しない

塚原，東吾

(Citation)

化学, 79(10):56-57

(Issue Date)

2024-10-01

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本記事は出版社の許諾を得て公開しております。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495793>



有害な無知：無知学は反知性主義を擁護しない

塚原 東吾

神戸大学大学院国際文化学研究科

無知学の狙いは、無知とは何かということに新たな観点をもち込むことである。だが、すべての無知は知で覆い尽くすことができるのか、無知学は啓蒙主義を推し進めるツールであるとかいう想定まではしていない。そうではなくて、もっと本質的な意味で、無知(未知)にはどのような性質があるのだろうかと問い直すことを意図している。

無知の立場を問い直すことは、いかなる無知をも擁護することにつながるのだろうか？ つまり無知学は「反知性主義」さえ肯定するのか、という誤解もよくされる。これは誤解の一つとして成立するのかもしれないが、誤解どころではなくて、深刻な曲解である。むしろ反知性主義が主張するのは「有害な無知」であることを指摘するのが、無知学の立場である。

蔓延する反知性主義

ここで反知性主義について簡単に振り返っておく必要があるだろう。反知性主義が90年代以降のアメリカで蔓延していることは

『化学』の読者にも伝わっていると思う。科学の成果や科学者・知識人に対する反発や敵意を表す言葉である。また、政治や社会的な政策決定において知力はいささか必要でなく、現実の問題については知識や理由(理性)は重要ではないという立場でもある。もちろん、「地球平面説」から「ダーウィン進化論の否定(神による創造説)」、さらに「トンデモ科学」のレベルまで、多くのバリエーションがあるのだが、一般には、知性よりも意志や感情を優先させる考え方(というよりむしろ心情や信念)である。陰謀論や宗教的な情熱、そして一方的な思い込みに基づいているものなど、さまざまなパターンがあるのだが、強烈な白人優位主義や異文化・女性の社会進出への嫌悪、インテリや科学者を毛嫌いすることや、かなり手の込んだフェイクなどと結びついている。学歴や知性に対してのある種の怨念(ルサンチマン)に基づいていることが多いのだが、既得権益を守りたいという意志が深部に見え隠れしているといってもいいだろう。

反知性主義の危険性

もちろん、知の権威主義を擁護しようというのではない。健康な懐疑主義や、権威の拒否は、民主主義の基礎である。だが、だからといって自分の心情や信念を押し通してもいいというわけではない。ましてやある社会集団に対して自分のルサンチマンをぶつけ、ヘイトに見まがうような主張をすることは何かなんでも避けなければならない。自分が属する集団の嗜好や慣習、そして思想や信条というのは、ほかの集団との折り合いをつけないといけない性質のものだからだ。

科学についていうならば、アメリカではダーウィン主義を否定する人がやたら多くなり、その陣営が政治的な影響力をもっていることもよく知られている。アメリカの一部では進化論ではなく、神が地球を創造したという創造説に新たなバージョンである「インテリジェント・デザイン説」が加わっており、これは驚くほどの人気をもっている。地球や自然、微生物から哺乳類、そして人間まで、高等なる知性(インテリジェンスのあるもの、すなわち神)がデザインしたものだというのが、ちなみに、この考え方では、地球の年代は46億年ではなく、6000年ということになるらしい。では化石は？ ノア方舟に乗りなかつた、すなわち神の選択にそぐわなかつた怪物たちの遺物ということになるという。

どうもこうなってくると、真剣

にいつているのか疑いたくなる。こういうのは、小学生受けする冗談にしか聞こえないのだが、これは本当の意味で、「冗談じゃない」。科学者にとっては科学の否定につながるので深刻な問題である。

アメリカでは、科学的な知見ではなく、宗教的な信念や感情的な欲動、そして感性に訴えるもののほうが「正しい」と考える人も少なくないようだ。ちなみに、「初期の人類は恐竜と同時代に生きていたか」という質問に、52%のアメリカ人が「イエス」と答えたという。

このように科学的知識の否定、もしくは「宗教的な信念に基づく無知」はいわば確信犯でもあるので、現代でも大きな問題を引き起こす種となっている。生物学史や進化論についてだけではなく、物理学史と化学史のハイライトについても、本来ならある一定のコンセンサスがあるといいたいのだが、アメリカではどうもそうではないようだ。地球の年代は(神がつくった)6000年前だ、白人は有色人種より神の似姿に近いから優越種族だ、地球は丸くない(地球平面説)、アポロの月面着陸映像は偽物だ、原子や分子をデザインした(創造した)のは神だ……などとマジメに答える人も多いらしく、こうなってくると、もはや笑い話では終われない。

そんな状況があるところで、無知を擁護するとか、無知の価値を見いだそうと主張して、さらに無知学といいだすとは何事だ、というお叱りを受けることになるかもしれない。こういうシリアスな問

題について、少しでもそのような非科学的な考えを擁護するのはけしからんというわけだ。

反知性主義に反対する側が、マウント取りのように、自分のほうが知性があるということを示しただけで、反知性主義を指弾しているような場合もあるというコメントも時折聞く。だがそういう皮肉なコメントは認めたうえでも、この問題は深刻さを増している。地球温暖化の否定や、環境政策の大きな変更など、具体的に多くの人が困る状況がすでに生まれている。

有害な無知を排除する

だから無知学の側としては、科学を否定することやあまりにも非合理的で信念のみに由来する物語を信じることにについて、ただ否定するだけでは不十分だと考えている。そのため、むしろそれらを重要な「研究の対象」として本格的に対処しようとしている。そしてそのような分析や検討の結果、こういう一群の非合理主義は、「有害な無知」と定義している。無知学の立場からは、アメリカでの非合理主義やインテリジェント・デザイン説は、完全に意図的に構成された「無知」、つまり「信念に基づいた無知」に基づいていると分析している。

さらにアメリカで蔓延する反知性主義は、無知をむしろ「振り回

している」もしくは政治的なプロパガンダの「道具として使っている」ことを指摘している。このようなことに着目して反知性主義を研究の対象にするのは、科学的知識そのものの価値を蔑ろにすることにはつながらない。むしろ真逆である。反知性主義をトンデモだといって軽く笑い飛ばして放置することは彼らの増長を野放しにする。また自分の立場を確保するためのマウント取りのような批判をしたり、その反批判にさらなるマウント取りの冷笑を繰り返すことも、もうやめたほうがよい潮時にきているだろう。そのような無知の悪しき使用方法を根源から考え直すこと、そしてこのような反知性主義に基づいている悪質な無知をより深く、厚く記述することが必要だと考えている。

なぜなら、これらは明らかな迷惑というだけでなく、「有害」な無知だからである。その発生機序や伝染経路や蔓延のための戦略、拡大や持続のシステムを知ったうえで、根源的な制御や発生源の駆除が必要だと考えている。反知性主義に対して無知学は、科学的知性をしっかりと、そして決意的に擁護する立場をとる。反知性主義がはびこり猖獗^{しょうけつ}を極める今の状況を^{ぼうあつ}防遏し、少なくともある程度の状況制御を試みるために、無知学の立場はより深い検討を進めようとしている。

つかはら・とうご ● 神戸大学大学院国際文化学研究科教授、1987年東京学芸大学大学院修士課程修了、1993年医学博士(Ph.D., オランダ・ライデン大学)、＜研究テーマ＞科学史、科学哲学、STS(蘭学、化学史、気候再現など)、＜趣味＞ブラタモリと孤独のグルメを合わせたような感じで行ったことのない街を歩くこと、淡水魚の水中観察